

2025

HARVARD-YENCHING
INSTITUTE WORKING
PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

**AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S
ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN**

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険 Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of chapters for an autoethnographic fiction provisionally titled *Futsuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual): Alice's Adventures in Multilingual Japan*, scheduled for publication in 2027; from June 2024 to February 2027, approximately twenty chapters, including a prologue and an epilogue, are being prepared in Japanese. Based on the author's personal experiences, the work follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese, and portrays her everyday use of multiple languages. Japan is often misunderstood as a "monolingual society," but this work demonstrates that it is, in fact, a "multilingual society," critically reexamining the notions of ordinariness and equality in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored through narratives of homeland loss and regeneration; at the same time, the work encourages critical reflection on our unawareness of the privileges of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies structuring our lives, aiming to evoke readers' own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, the project seeks to explore the possibilities of creating a socially just world, and, in preparation for a future English edition—and to explore the possibilities and limits of translation—English versions of all chapters will also be included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Ordinariness and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約: 本作は、2027 年度に出版予定の自伝的民族誌的フィクション『ふつうのマルチリンガル——多言語社会日本におけるアリスの冒険』（仮題）の各章の初稿であり、2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグとエピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が日常的に多言語を使う姿を描き、日本がしばしば「モノリンガル社会」と誤解される一方で、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」の概念を言語使用の観点から批判的に問い直す。多様性・共生・植民地主義や戦時加

害性・言葉の力といったテーマを故郷喪失と再生の物語を通じて描き出すとともに、「日本語」や「英語」の特権性や生活を形づくる言語的ヒエラルキーへの無自覚さについて批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を呼び覚ますことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的に公正な世界を構想する可能性を探る試みであり、将来の英語版出版に備えると同時に翻訳の可能性と限界を探るために、全章に英訳を付す。

キーワード: マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつう／平等主義、植民地主義・戦時加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所

青山和佳

8 深南部 The Deep South 「アメリカ」を探してⅡ

サウスアラバマ大学

きみはフランス語で「失礼します」と言い、わたしは透明な沼に溶けてゆく。

アラバマ州に向かう途中、おとうさんの友人夫妻をノースカロライナ大学チャペルヒル校にたずねた。リリーとジョンはともに台湾出身の教授で、日本留学の経験があり、ときおりわたしに日本語で話しかけ、日本料理のレストランに連れていってくれた。リリーは、わたしの「メイクが軽すぎる(too light)」と言い、お気に入りの化粧販売員を自宅に呼び、「アメリカで暮らす二十代の女性」がもつべき一式を贈ってくれた。マットなリキッドファンデーション、ダークブラウンのアイライナー、ローズブラウンのリップスティック。なんだかぐっと大人っぽく、落ち着いた雰囲気になってしまい、着ている T シャツとマドラスチェックのコットンパンツに合わない。「自分で車を運転することも覚えないとね。それが自^{independence}立よ」と言いきかされた。

巨大なターミナルと幾重にも連なるコンコースがありながら、迷うことなく自動コンベアに乗せられた荷物のように搭乗口へと導かれるアトランタ国際空港を經由し、モービル (Mobile, /mou'bi:l/) ¹ へ向かう。眼下には、果てしない湿地と絡み合う川がメキシコ湾²に溶け込んでいく。ここを選んだのは、潮の香る都市だから。モービルの名は、かつてこの地に暮らしていた先住民に由来する。十八世紀初頭、フランス人は入植地 (Fort Louis de la Mobile) を築き、フランス領ルイジアナの州都と定めた。交易で栄えた……とは、どういう意味だろうか。フランス人女性も来たのだろうか。黄熱病ももたらされたのだろうか。カリブ海のサン＝ドマング (Saint-Domingue) から、^{en-slaved} 奴隷にされたアフリカ系の人びともここへ連れてこられたはずだ。

¹ 日本語表記の慣例にしたがい「モービル」としたが、実際の発音は「モウビール」に近い。

² 二〇二五年一月二十日、ドナルド・J・トランプ大統領は大統領令一四一七二号に署名し、アメリカ合衆国の連邦政府機関に対して、それまで“Gulf of Mexico (メキシコ湾)”と呼ばれてきた海域を“Gulf of America (アメリカ湾)”の名称で使用するよう指示した。ただし、この名称変更は連邦政府内での使用に限られ、国際的には従来どおり“Gulf of Mexico”が用いられている。

サウスアラバマ大学 (University of South Alabama: 通称 USA) を選んだのは、東海岸とは違う場所—どう違うかよく想像できていなかったものの—にある、「手頃な」学費の州立大学に通ってみたい、日本出身者の少ない地域を見てみたいという好奇心からだ。南部の湿潤な気候にふさわしく、キャンパスには芝生が広がり、背の高い松の木が繁っている。九月はまだ暑い。留学生センターが地元住民のホストファミリーをつけてくれる。メアリーとジョセフという白人の夫妻で、高校生の息子がふたりいた。「特別支援教育の教師なの」と自己紹介するメアリーが、小さめの家ながらプールのある庭に案内してくれる。「何が食べたい？」ときかれ、とっさに「ほうれん草」と答える。一瞬げんそうな表情になったものの、一緒に買い出しに向かう。

この大学は四学期制で、わたしは九月から十二月までの秋学期に入学した。まだ聴講生とはいえず、学生ビザ (F-1) を維持するためにフルタイムの履修が必要で、スペイン語のほかに数学、音楽、英語を取ることにする。音楽では、厳しくないオーディションを経て、ピアノ集中コースの受講が許された。初めての個人レッスンの日、グランドピアノのある練習室をたずねると、グレイヘアの白人の男性教授が迎えてくれ、自己紹介をしたのち、あなたは日本の出身だから Michio Miyagi を弾いてみませんか、と言う。ピアノを習ってきたものの、「西洋」の作曲家が前提だったから、何を言われているのか分からない。しばらくして「ああ、宮城道雄の『春の海』ですね」と答えると、そう、それから次回はメトロノームを持参してください、とほほえむ。

ザリガニを食べる

「オリエンタル」とまだ呼ばれることもあったけれど、わたしは大学内の数少ない「アジア系」学生コミュニティにゆるやかに包まれている。多くは「留学生」のようであり、「難民」として故郷を脱出した学生もいることにはとどまる。ベトナム戦争後、南部には難民受け入れプログラムによって東南アジア出身者が移住し、教育機関にも進学していたことを知らなかった。「難民」ではないものの、祖国の政策によって大学入学に不利な中華系マレーシア人、バイリンガリズム政策のもと英語習得が必須となったシンガポール華人、政治の不安定さに悩むネパール人、激しい競争社会を生き抜くため留学を選んだ韓国人、今年の六月に起きた天安門事件後に帰国しないことを決めた中国人。それぞれの事情を抱えながら、ここで学んでいる。

それぞれの母語のアクセントが透ける「英語」でおしゃべりする。頭のなかに、ともだちの呼び名をカタカナで貯蔵する。ブルースリー、リーベンホー、ビンチン、ナビン、ケイン、ジュン、ナオ、キョウコ、ミゲル。このうち、ナビン (ネパール出身) とミゲル—一八九九年以来、アメリカ合衆国の海外領土、あるいは未編入領土でありつづけているプエルトリコ自治連邦区 (スペイン語: Estado Libre Asociado de Puerto Rico, 英語: Commonwealth of Puerto Rico) の出身—のふたりは「おはし文化圏」育ちで

はないものの、週末になるとわたしがキャンパス近くに借りているアパートに集まり、数ドルずつ出し合い、車でウォルマートに買い出しに行き、その週の当番が料理し、みんなで食べる。わたしの台所にさまざまな調味料が並んでゆく。

このコミュニティとはべつに、English 101—大学での学術的な読み書きの基礎を身につけるための必修科目—でいっしょになったベトナム出身のリサとダンというカップルと、その友人かつ同居人のビルと親しくなった。日曜日には三人の家があるミシシッピ州ビロクシ（綴りは Biloxi、現地では「バラクシ」のように発音される／bəˈlaksi／）のベトナム系コミュニティに連れていってもらう。途中、カトリック教会でミサにあずかり、カンボジア系経営者の店でザリガニ^{crawfish}を買ってゆく。アパートの床に新聞紙を広げ、真っ赤にゆでられたザリガニを積み上げた鍋をかこんで座り、食べ始める。ビルが手際よくザリガニをつかみ、片手で尻尾を持ちながら、もう片方の手で頭をねじるようにして取り外す。すると、白く透き通った身が姿をあらわす。彼はそれをすばやく口に放り込み、頭を吸いながら「これがうまいんだよな」と、にっこりする。わたしも吸ってみる。苦い。泥の多い川底の味。

その小さなアパートにはエアコンがなかった。居間とダイニングをかねた部屋の壁には、ベトナムの地図をかたどった時計がかかっている。三人の出身地であるベトナム南部の漁村ではなく、アメリカ中部の標準時間（CST）を刻んでいる。Excuse moi と言いながら、ビルがタイプライターを持ってきて、わたしの English 101 用の手書きのレポートを打ってくれる。リサとダンが、インスタントヌードルを作り、みんなで食べる。たっぷりのもやし、香りのよい緑の葉っぱが別皿に添えられており、黄色いプラスチック容器に入ったサンキストレモン、プラスチックボトルに入った赤い辛いソースと黒っぽい甘いソースもあり、それぞれの好みでスープの味をととのえる。食べられない何かが入っている？ あ、これは、豚の内臓を刻んだもの。心臓だろうか。

おなかが満ちたらお昼寝する。

ベッドルームで、リサとダンはひとつのブランケットにくるまって温め合うネコのように寄り添って眠っている。そのベッドに寄りかかりながら、ひざを抱えてすわったビルは、ふたりの両親やキョウダイはこちらに来ることができた、でも、ぼくはひとりなんだ、こちらに来る前、短い期間、日本にいた、と弱々しくほほえみ、ためいきをつく。ねえ、さっき食べたザリガニ、単独生活を好むのでしょうか？ うん、そうらしいけれど、冬眠するときは、泥のなかに潜り込んで近い距離にいることもあるらしいよ。起きているときは仲間同士で協力する習性はなく、むしろ互いに敵対的な関係になることが多いのに不思議だよね。沈黙が降りつもる。どうしよう。ハグして背中をぽんぽんするしかない。ハサミをそっとしまっ、傷つけないように。

小さなボートと一緒に乗り込むかのように。

ふたつの世界—接続、分割、再統合

スペイン語授業の担当はアルゼンチン出身の女性教授で、ダークブラウンの長い髪が肩を越えて流れ、柔らかいウェーブがかかっている。中級クラスになり、接続法(西: subjuntivo, 英: subjunctive)を習う。直接法では事実や確実なことを表現するのにたいし、接続法では願望、不確実なこと、仮定、命令、そして感情などを表現する。ほかの言語にもあるのだけれど、スペイン語では日常的に使われ、活用もややこしいので、スペイン語の特徴のように感じられるらしい。「わたしはアリシアが日本語を話すと思う」(**Creo que Alicia habla japonés.**)は直接法、「わたしはアリシアが日本語を話さないと思う」(**No creo que Alicia hable japonés.**)は接続法、「君が好きだ」(**Te quiero**)は直接法、「君が好きかもしれない」(**Puede que te quiera**)は接続法というように。まだぴんとこないけれど、ここが揺れると別の世界に行くのかな。

『エル・ノルテ』(The North)³という映画を授業のなかで観る。中米のグアテマラの「貧しい山村」で暮らす兄妹、エンリケとロサが政府軍に父親を殺され、母親を連れ去られ、村を破壊されて、「北(エル・ノルテ)」の「自由の地」、アメリカ合衆国をめざし、長い旅にでる。グアテマラとメキシコの国境を越え、ブローカーの手を借りて地下に埋められた、いまはもう使われていない下水管を腹這いでくぐり抜けてメキシコとアメリカ合衆国の国境を越える。きらめく夜景のサンディエゴからロサンジェルスに向かい、兄はウェ이터、妹は縫製工場のアイロン係や裕福な白人家庭の家事手伝いとして働き、ときに仕事で昇進したり、英語の上達を喜んだりするものの、「合法的ではない」身分ゆえに苦勞し、「夢」がかなわないまま悲劇の結末を迎える。

みんなでディスカッションする。ロサと母親の会話はスペイン語ではない部分があったように思います。ああ、それはマヤ諸語のキチェ語ですね。そうか、それでロサが村を離れるとき、カラフルな服を脱ぐのですね。ああ、それ、わたしも印象に残っています。先住民であることを捨てる意味が込められているのかな。あのシーン、白いキャンドルがゆらめいていて。そうそう、ロサがひとりで、お母さんにひとつ、お父さんにひとつ、村にもひとつ、光を捧げて出発する。あのね、ぼくは少し批評的にも観て、エンリケとロサは純粹無垢すぎてメロドラマみたいだと思ったよ。そういえば、出てくる「白人のアメリカ人」は理解も善意もありすぎる。そう、それで何かよくないことがおこると、それはメキシコ人やラテン系の人の仕業なんだよね。

『エル・ノルテ』という^{borders}国境を題材にした映画を観たよ、とブルースリーに伝える。「どういう意味？」ときくので、「北」という意味だよ、と返す。ブルースリーはニックネーム。韓国からの留学生で、ときどきわたしたち、つまり東アジア「お箸文化圏」出身者をランチに誘い、アパートのキッチンで辛^{シン}ラーメンを出してくれる。赤く煮え立つスープにやや太めのちぢれ麺が浮かんでいる。「北か、ところで、アリス、

³ Gregory Nava 監督・脚本、Anna Thomas 脚本、プロデューサー、David Villalpando, Zaide Silvia Gutiérrez 主演、一九八三年製作のアメリカ合衆国のインデペンデント映画。

日本から北朝鮮^{North Korea}を訪問できる？」ときく。穏やかな表情のままで。ハンマーであたまを殴られたかのように、ぼうぜんとしてしまう。言葉が見つからない。ブルースが続ける。昨日、「ベルリンの壁」の上に人びとが登って、ハンマーでそれを打ち砕いていたよね、テレビのニュースで見たよ。

ブルースが言う。こんどの週末、みんなを誘ってモンゴメリー（Montgomery, /mə:nt'gʌməri/, 実際には/'mʌŋgəmri/のようにも聞こえる）に行くのはどうかな？ うん、わたし、まだ行ったことないし、行ってみたい。そうなんだ、あそこはアラバマ州の州都で、公民権運動に深く関わる街だってことは知っているよね。あー、うん、なんとなく。バス・ボイコット事件とか、マーティン・ルーサー・キングとか、でも詳しくはわからない。そうだね、観光名所になっている史跡もあるだろうし、行ってみよう。いいよ。土曜の朝、きみのアパートに迎えにいくよ。うん、ジュンにももう一台、車を出してもらおう。そうだね。連絡しておくね。うん、よろしく。

オーレリアの訴訟、あるいは、銅像にならなかった女性たちへ⁴

バスの座席は、
ただの木と革ではない。
わたしの重みがここにある。

わたしはただ座っていた。
その日、その時、
ローザ・パークスより先になるとは知らず。

降りろと命じる声が
わたしの耳を突く。
それは、いったい誰の声か。

「わたしたち黒人がキング牧師に呼びかけたのであり、
彼に命令されたわけではありません」
声をあげたのは わたしたちだった。

わたしが席を立てば、
この街の沈黙は、
また、続く。

わたしは立たない。

⁴ この詩は、以下の文章へのオマージュ。「第九章 オーレリアの訴訟—ジム・クロウとの闘い、一九五〇～一九七〇年年」、ダイナ・レイミー・ベリー、カリ・ニコール・グロス著、兼子歩、坂下史子、土屋和代訳、『アメリカ黒人女性史』勁草書房、二〇二二年。

立たないことで、わたしの脚は、
自由へと踏み出す。

父亡き六人の子が、わたしを待つ。
洗濯物が風に揺れ、
針仕事で夜を灯す。

それでもわたしは座る。
ひとつの座席が、
世界のかたちを変えることを信じている。

バスはいまも走る。
わたしの重みを置いて。
ここに、わたしがいたことを刻みながら。

パンを焼き、サンドイッチを売り、
女性たちは声を集め、
夜のキッチンが革命を灯す。

軍に住む女性たちも手をさしのべる。
ハンドルを握る白い指、
南部の闇を照らしながら。

川の底に眠る蝶

Unya, もう一回言わせてね。
オーケイ、Để mình nói lại cho bạn nghe.⁵

きみはフランス語で「失礼します」と言い、わたしは透明な沼に溶けてゆく。
Mo-ingon ka og 'excuse-moi' sa Pranses, ug matunaw ako sa tin-aw nga swamp.

一月の末、オールド・シェル・ロードの夜は静かで、どこか湿地に似ていた。ツイン
オークスの部屋の灯りがふっと消え、闇が泥のように流れ込む。ブレーカーを戻そう
とドアを開けた、その瞬間、影に押し倒される。冷たい細いひものようなものが巻き
つき、呼吸を奪われる。時間は絡まった糸のように引きちぎれ、¡Dios mío, que no
exista este momento! 叫びたいのに声が出ない。意識が凍りつき、暗闇の裂け目へと
滑り落ちる。最後に見たのは、街灯の白い光。天国？ ちがう逆。生きているのに死
んでいる。Ojalá pudiera desaparecer...目が覚める。世界は何も変わっていない。

⁵ベトナム語。

わたしだけが破壊されている。遠くに、発見者らしい人の姿。遠くに、床に残された青いネクタイ。遠くに、医師、看護師、警察官の声。「加害者」の名を告げられない。

「オリエンタル」の、あるいは「アジア系」の「女の子」がそんなふうに傷つけられることは「よくある」ことで、とくにニュースにもならないし、砕け散ったわたしたちのたましいや身体のかけらをていねいに集めてくれる人たちもいない。わたし自身がやってきた「日本」の、あるいは「東アジア」の文化においても、何が起きたか告げることも期待されていないし、むしろ何が起きたか話してはいけない、それはわたし自身だけではなく、まわりの人びとを傷つけてしまうから、と教えてこまれている。わたしたちの声は、あらかじめ奪われている。わたしたちの感情は、あらかじめ封じられている。わたしたちは、怒ることも悲しむこともない、できない。わたしは知らないうちに、自分のなきがらをミシシッピ川の底に眠る蝶へと変えてしまった。

わたしは中華系の友人たちが住むアパートの一室に引き取られ、そこで守られながら帰国の日を待つことになった。前年の十一月、聴講生から学部生への編入が認められ、^{President's List} 秋学期の成績はオール A で学長表彰リストにも載り、^{I will gather memories for a lifetime} 「一生の思い出をつくろう」と喜んでいたことももう思い出せない。マレーシア出身のリーベンホーが、これだけでも食べてと毎朝、サンメイドのレーズンをくれる。赤い小箱に、太陽に照らされて赤い帽子をかぶった女性がマスカット色のぶどうをバスケットいっぱい抱えてほほえんでいる。帽子の細い赤いリボンが首もとで結ばれている。気分がわるくなる。ふさふさのぶどう。水分が抜け、糖がこげて、黒い粒になる。口に入れば甘い。かつてみずみずしかったもの。ひそやかな最後の味がする。

二月のはじめ、みんなに連れられてニューオーリンズ（New Orleans、現地では /'nɔ:rlənz/、一般的な米語では /nu: 'ɔ:rlɪ:ənz/ と発音される）（に行った。ベニエを食べ、オイスターを食べる。ミシシッピ川はくねくねしていて、川底は浅かったり深かったりするらしい。最も深いところは最大二百フィート（六十メートル）以上あり、流れも速く、落ちるにはもってこい。たましいの帰り着くところ。わたしはその川底に眠っており、沈黙が泥のように積もるだろう。この日は「肥沃の火曜日(Shrove Tuesday)」、復活祭(Easter)の四十六日前で謝肉祭の最終日、灰の水曜日の前日、マルディグラ（Mardi Gras）だった。フレンチ・クォーターのバーボン・ストリートで、バルコニーから無数の手が放つビーズをキャッチする。Show your tits! Show your tits! という叫び声に歓声があがる。わたしの声はそこにはない。

三月になり、街を去る日がきた。ひとりで空港に着くと、スペイン語の授業で一緒だったティムがぐうぜんそこにいた。ティムはアメリカ人で、春休みを前に帰省するところだった。日本に帰るの、と告げると、For good? ときくので、うん、そう、永久に、と答える。Oh……と言葉を詰まらせ、ハグしてくれた。We will miss you. ああ……^{That's sweet Thank you}やさしいね。ありがとう。

Nobody knows that I am a ghost.

Nadie sabe que soy una fantasma.

¿Dónde van mis almas muertas?

Where do my dead souls go?

白い蝶、どこに沈んだの。川底の砂が言った。
どこへゆく。小さな二枚貝が言った。

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventure in Multilingual Japan⁶

Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo
Waka Aoyama

Chapter 8 The Deep South — In Search of “America,” II

University of South Alabama

You say “*excuse-moi*” in French, and I dissolve into a clear, silent swamp.

On the way to Alabama, I visited my father's friends at the University of North Carolina at Chapel Hill. Lily and John, both professors from Taiwan, had once studied in Japan; they sometimes spoke to me in Japanese and took me to Japanese restaurants. Lily told me that my makeup was “too light” and invited her favorite cosmetics salesperson to their home, gifting me a full set of what she believed a “young woman in her twenties living in America” should have: matte liquid foundation, dark brown eyeliner, rose-brown lipstick. Suddenly I looked more grown-up, more composed—so much so that it no longer matched my T-shirt and madras-check cotton pants. “You should learn to drive. That's what *independence* means here,” she said.

Passing through Hartsfield Atlanta International Airport (the airport now known as Hartsfield–Jackson)—with its immense terminal and endless concourses, yet guiding passengers toward their gates as effortlessly as luggage riding on a conveyor belt—I flew on to Mobile (/moʊ'bi:l/). From the window I saw an expanse of wetlands where tangled rivers dissolved into the Gulf of Mexico⁷. I chose this place because I wanted a city that smelled of salt. The name *Mobile* derives from the Indigenous people who once lived here. In the early eighteenth century, the French built Fort Louis de la Mobile and made it the capital of French Louisiana. It “prospered through trade”—but what exactly does that mean? Did French women also come here? Did they bring yellow fever? People of African descent, enslaved and transported from Saint-Domingue in the Caribbean, must also have been brought to this place.

I chose the University of South Alabama—known simply as USA—out of curiosity: I wanted to live somewhere different from the East Coast, though I could hardly imagine how it would differ, and to try a “reasonably priced” state university in a region with few people from Japan. The humid southern climate suited the campus, with its wide lawns, tall pines, and lingering September heat. The International Student Center assigned local host families. Mine was a white couple named Mary and Joseph, with two high-school-aged sons. “I'm a special-education teacher,” Mary said as she guided me through their

⁶ In this essay, italicization of non-English expressions is used solely for readability and does not imply any hierarchy among languages.

⁷ On January 20 2025, President Donald J. Trump signed Executive Order 14172, directing U.S. federal agencies to adopt the name “Gulf of America” for the body of water formerly known as the Gulf of Mexico. While the change applies within the U.S. federal government, the internationally recognized name remains “Gulf of Mexico”.

modest house to a backyard with a small pool. When she asked what I wanted to eat, I blurted out “spinach.” She looked puzzled for a moment—perhaps thinking I wanted something nutritious even if not delicious—but took me along to shop for groceries.

The university followed a quarter system, and I entered in the fall quarter from September to December. Although I was still a non-degree student, my F-1 visa required full-time enrollment, so I took Spanish, mathematics, music, and English. In music, after a not-too-strict audition, I was allowed to join the piano performance track. On the day of my first private lesson, I stepped into a practice room where a grand piano waited, and the professor—a white man with gray hair—welcomed me. After introductions, he said, “Since you’re from Japan, how about playing something by Michio Miyagi?” Having studied piano only within the frame of “Western” composers, I did not understand at first. A moment later I said, “Oh—Miyagi’s *Haru no Umi*, right?” “Yes,” he smiled. “And please bring a metronome next time.”

Eating Crawfish

I was still sometimes called an “Oriental,” yet I found myself gently enfolded by the small “Asian” student community on campus. Many looked like “international students,” but some had in fact left their homelands as “refugees.” I had not known that, after the Vietnam War, Southeast Asians had resettled in the South through refugee reception programs and entered local educational institutions. There were others who were not “refugees,” yet had arrived here because of disadvantage or hardship: ethnic Chinese Malaysians whose government policies put them at a disadvantage for university admission; Singaporean Chinese whose country’s bilingualism policy made English proficiency mandatory; Nepalis grappling with political instability; Koreans who chose overseas study to survive an intensely competitive society; Chinese students who decided not to return home after the Tiananmen incident that had taken place this June. Each carried their own circumstances, studying here nonetheless.

We chatted in English—an English through which each person’s first-language accent subtly showed. In my mind I stored everyone’s names in katakana: ブルースリー (Bruce Lee), リーベンホー (Lee Ben Ho), ビンチン (Bing Qin), ナビン (Navin), ケイン (Kane), ジュン (Jun), ナオ (Nao), キョウコ (Kyoko), ミゲル (Miguel). Among them, Navin (from Nepal) and Miguel—from the Commonwealth of Puerto Rico (Spanish: Estado Libre Asociado de Puerto Rico), a United States overseas and unincorporated territory since 1899—did not grow up in what I thought of as “ohashi cultures” (regions where eating with chopsticks is part of everyday practice). Still, on weekends they came over to the apartment I rented near campus. Each of us contributed a few dollars, we drove to Walmart to buy groceries, and whoever was “on duty” for the week cooked. My kitchen shelves gradually filled with all kinds of seasonings.

Separate from that circle, I became close to Lisa and Dan, a couple from Vietnam I met in English 101—the required course for learning the basics of academic reading and writing—and their friend and housemate, Bill. On Sundays, they would take me to the Vietnamese community in Biloxi (/bəˈlʌk.si/), Mississippi, where the three of them lived. On the way we attended Mass at a Catholic church, then stopped at a Cambodian-owned

store to buy crawfish. We spread newspapers across the apartment floor, sat around a pot heaped with bright red boiled crawfish, and began to eat. Bill expertly grabbed a crawfish, held the tail with one hand, twisted off the head with the other, revealing the white, translucent meat. He popped it quickly into his mouth, then sucked on the head. “This is the good part,” he said, smiling. I tried it too. Bitter—the taste of a muddy riverbed.

The small apartment had no air conditioning. On the wall of the living–dining room hung a clock shaped like a map of Vietnam. It kept Central Standard Time (CST), not the time of the southern fishing villages where the three of them had been born. Saying “Excuse moi,” Bill brought out a typewriter and typed up my handwritten English 101 paper. Lisa and Dan cooked instant noodles, and we all ate together. A generous heap of bean sprouts and fragrant green herbs was served on a separate plate. A yellow plastic container held Sunkist lemon; red hot sauce and a dark, sweet sauce came in plastic bottles, letting each of us season our broth the way we liked. Something unfamiliar floated in the soup. Oh—it was chopped pork innards. Perhaps heart.

Once our stomachs were full, we took a nap.

In the bedroom, Lisa and Dan curled up together under a single blanket, warming each other like cats. Leaning against their bed with his knees pulled up, Bill said softly, “Their parents and siblings could come here. But I’m alone. Before coming here, I spent a short time in Japan.” He smiled faintly and sighed. “Hey, those crawfish we ate earlier—they’re solitary, right?” “Yeah, that’s what they say. But apparently when they hibernate, they burrow into the mud and stay close to one another. Even though they don’t cooperate when awake, and are often hostile toward each other—it’s strange, isn’t it?” Silence settled over us. What could I do? All I could manage was to hug him and pat his back. Put the claws away gently, so as not to wound.

As if climbing into a small boat together.

Two Worlds: Connection, Division, Reintegration

My Spanish class was taught by a professor from Argentina, a woman whose long dark-brown hair fell past her shoulders in soft waves. Once we moved into the intermediate level, we began learning the *subjunctive*—*subjuntivo* in Spanish. While the indicative expresses facts and certainties, the subjunctive conveys wishes, uncertainties, hypotheticals, commands, and emotions. Other languages have similar functions, of course, but in Spanish the subjunctive is used so frequently—and its conjugations so intricate—that it feels like a distinctive feature of the language. “I think Alicia speaks Japanese” (***Creo que Alicia habla japonés***) uses the indicative. “I don’t think Alicia speaks Japanese” (***No creo que Alicia hable japonés***) shifts into the subjunctive. “I love you” (***Te quiero***) is indicative; “Maybe I love you” (***Puede que te quiera***) is subjunctive. I still couldn’t quite grasp the distinction. Perhaps the heart, when it trembles, slips into another world altogether.

We watched a film in class: *El Norte* (“The North”)⁸. It follows a brother and sister, Enrique and Rosa, living in a “poor mountain village” in Guatemala. After their father is killed by government soldiers, their mother disappeared, and their village destroyed, they set out for “El Norte”—the “land of freedom,” the United States. They cross the Guatemala–Mexico border, and with the help of a *coyote*, crawl on their stomachs through an abandoned sewage pipe buried underground to cross from Mexico into the United States. From the glittering nightscape of San Diego they head toward Los Angeles. The brother works as a waiter; the sister finds jobs as an ironer in a garment factory and later as a domestic helper in an affluent white household. They celebrate small successes—advancement at work, progress in English—yet their “undocumented” status weighs on everything, and their “dream” remains unfulfilled, ending in tragedy.

During our class discussion, someone said, “I think parts of the conversation between Rosa and her mother weren’t in Spanish.” “Yes,” another replied, “that was K’iche’, one of the Mayan languages.” “Ah, that explains why Rosa removes her colorful clothing when she leaves the village.” “Yes—I remember that scene too. Maybe it symbolizes abandoning her Indigenous identity.” “And the white candlelight flickering.” “Right—Rosa offers three flames: one for her mother, one for her father, and one for the village before she departs.” Another student added, “I watched it a bit critically. Enrique and Rosa felt almost too innocent—like a melodrama.” “And the ‘white Americans’ who appear are almost unrealistically kind and understanding.” “Yes—and when something bad happens, it’s always the fault of Mexicans or other Latinos.”

I told ブルースリー (Bruce Lee)—that was his nickname, a Korean student who often invited us, the East Asian “ohashi cultures” group, for lunch and cooked *Shin* (辛) ramen for us in his apartment—that we had watched a film about *borders* called *El Norte*. “What does the title mean?” he asked. “It means ‘the North.’” He nodded. The noodles floated in a boiling red soup. “The North... Alice, by the way, can you visit North Korea from Japan?” he asked, his expression gentle and unchanged. It felt as though someone had struck my head with a hammer. I couldn’t speak. Bruce continued, “Yesterday, people were climbing on top of the Berlin Wall, hammering it down. I saw it in the news.”

Bruce said, “How about inviting everyone and going to Montgomery this weekend?” (Montgomery, /mɒntˈɡæməri/—often heard locally as /ˈmʌŋɡəmri/). “Yes, I’ve never been. I’d like to go.” “Right. You know it’s the capital of Alabama and closely connected to the civil rights movement.” “I know... vaguely. The bus boycott, Martin Luther King, but not in detail.” “There must be historical sites that are now tourist spots. Let’s go.” “Okay.” “I’ll pick you up at your apartment on Saturday morning.” “And I’ll ask Jun to bring another car.” “Good idea.” “I’ll contact him.” “Thanks.”

Aurelia’s Case, or To the Women Who Never Became Statues⁹

⁸ A 1983 U.S. independent film directed by Gregory Nava, co-written and produced by Anna Thomas, and starring David Villalpando and Zaide Silvia Gutiérrez.

⁹ This poem is an homage to the discussion in “Chapter 9: Aurelia’s Lawsuit—Fighting Jim Crow, 1950–1970,” in *A Black Women’s History of the United States*, by Daina Ramey Berry and Kali Nicole Gross, translated into Japanese by Ayumi Kaneko, Fumiko Sakashita, and Kazuyo

The bus seat
is not merely wood and leather.
My weight is here.

I was only sitting.
On that day, at that hour,
not knowing I would come before Rosa Parks.

A voice ordering me to get up
pierces my ear.
Whose voice is it?

“We Black women were the ones who called upon Dr. King—
not the other way around.
It was we who raised our voices.”

If I rise,
the silence of this city
will continue again.

I will not rise.
By staying seated, my legs
take a step toward freedom.

Six children, fatherless, wait for me.
Laundry stirs in the wind,
needlework lights the night.

Still, I remain seated.
I believe that a single seat
can alter the shape of the world.

The bus keeps moving,
carrying my weight with it—
marking that I was here.

Baking bread, selling sandwiches,
women gather their voices,
night kitchen kindling the revolution.

Women living on base also reach out—
white fingers gripping the steering wheel,
cutting through the southern dark.

Tsuchiya (Keisō Shobō, 2022).

The Butterfly Sleeping at the Bottom of the River

Unya, let me say it again.

Okay, Để mình nói lại cho bạn nghe.

You say “excuse-moi” in French, and I dissolve into a clear, silent swamp.

Mo-ingon ka og "excuse-moi" sa Pranses, ug matunaw ako sa tin-aw nga swamp.

At the end of January, the nights along Old Shell Road were quiet, almost marsh-like. In my Twin Oaks room the light suddenly went out, and darkness poured in like thick mud. When I opened the door to reset the breaker, a shadow struck me down. Something thin and cold—like a cord—wrapped around me, cutting off my breath. Time tore apart like tangled threads. *¡Dios mío, que no exista este momento!* I wanted to scream, but no sound came. My consciousness froze, and I slid into the split seam of the dark. The last thing I saw was a white streetlight. Heaven? No—the opposite. A state where one is alive and dead at once. *Ojalá pudiera desaparecer...* wake up. Nothing in the world has changed. Only I have been destroyed. In the distance, I see the figure of someone who must have found me. In the distance, a blue necktie left on the floor. In the distance, the voices of doctors, nurses, police. I cannot speak the perpetrator’s name.

It is considered “ordinary,” even unsurprising, that an “Oriental” or “Asian” “girl” would be harmed in such a way. It is rarely treated as news, and no one comes to gather the shattered pieces of our souls and bodies with care. In the cultural worlds I myself come from—“Japan,” or more broadly “East Asia”—we are not expected to say what happened. In fact, we are taught that we *must not* speak of it, because doing so would wound not only ourselves but those around us. Our voices are taken from us in advance. Our feelings are sealed away before they can ever surface. We are not allowed to be angry or to grieve—we cannot. Without realizing it, I transformed my own lifeless self into a butterfly sleeping at the bottom of the Mississippi River.

I was taken into a room in the apartment where my Chinese friends lived, sheltered there as I waited for the day I would return home. Just a few months earlier, in November, I had been approved to transfer from non-degree to undergraduate status; my fall-quarter grades were all A’s, earning me a place on the President’s List, and I had written, “*I will gather memories for a lifetime,*” delighted by the future I imagined. Now I could no longer recall that feeling. Each morning, Lee Ben Ho from Malaysia handed me a small box of Sun-Maid raisins—“At least eat this,” he would say. On the red box, a woman in a sunlit red bonnet smiles as she holds a basket brimming with muscat-colored grapes; the ribbon of her hat ties neatly beneath her chin. The sight makes me nauseous. Grapes once lush in their clusters, their water drained, their sugars caramelized, turning into blackened beads. Sweet once they touch the tongue. Things that were once full of life. Their faint, final taste.

In early February, they took me to New Orleans (locally pronounced /'nɔ:rlənz/; more generally /nu: 'ɔ:rlɪ:ənz/) . We ate beignets and oysters. I learned that the Mississippi River twists and coils, its riverbed sometimes shallow and sometimes plunging deep—its deepest points reaching more than two hundred feet (over sixty meters), the current swift, the water perfectly suited for falling into. A place where a soul might come to rest. I, too, lay at the bottom of that river, I thought, where silence would pile up like mud. That day was Shrove Tuesday—the last day of Carnival, forty-six days before Easter, the eve of Ash Wednesday—Mardi Gras. In the French Quarter on Bourbon Street, I caught beads hurled from countless hands on the balconies above. “Show your tits! Show your tits!” the crowd shouted with wild delight. My voice was nowhere among them.

When March came, the day arrived for me to leave the city. At the airport, alone and waiting to check in, I happened to see Tim—an American classmate from my Spanish course—who was heading home for spring break. When I told him I was returning to Japan, he asked, “For good?” I said yes, permanently. “Oh...” he murmured, his voice catching as he hugged me. “We will miss you.” Ah... that’s sweet, I said. Thank you.

Nobody knows that I am a ghost.
Nadie sabe que soy una fantasma.

¿Dónde van mis almas muertas?
Where do my dead souls go?

White butterfly, where have you sunk? asked the sand at the riverbed.
Where are you going? whispered a small three-ridge mussel.